

耕土耕心

第 32 号

令和 7 年
3 月 20 日

編集・発行

静岡県立農林環境
専門職大学同窓会

〒438-8577
磐田市富丘678の1
電話
0538-31-7901

農業振興と地域振興

同窓会長 大原正和



ついこの間、新年を迎えたと思っていたら春の彩が感じられるような季節になりました。

同窓生諸兄はますますご活躍のことと思います。

私は、毎朝「日本農業新聞」を読むのが日課となっていますが、昨今の記事の多くが「改正基本法成立」、「適正な価格形成需要の高まり」、「相次ぐ自然災害の発生」などとなっており、いずれも農家にとって関心が高く、喫緊の課題になっています。

私はこれに加え、「農業振興と地域振興」に大きな関心をもってきました。農業振興においては、土地条件の良いところで先端技術を駆使して大規模に展開すれば多くの農業所得が得られます。が、我が県ではこれの対極にある農業経営が多く、再生産可能な農業所得を得られないために縮小や離農を余儀なくされているのが現実です。

このことは中山間地を主体に農村地域への影響が大きく、農業経営上の耕作放棄地が増加するばかりでなく、水利施設、農道、農地などが荒廃し、地域社会の維持存続が困難な状況を生み出しています。加えて離農などにより地域の担い手が減少することで地域コミュニティそのものが危機的状況になっています。

農政は農業を経済産業的な観点から捉え、食料安全保障、農業所得増大等を目標の柱としています。が、いまこそ農業をベースとした地域振興にも目を向け、100年後も農村地域が存続する手段を構築しなければならぬと思います。我が国は森、山、川を背景に都市部での豊かな暮らしが成り立っており、農村はなく

てはならない存在なのです。

そのため、中山間地における必要所得の保障、条件不利地域での小規模土地基盤整備、農村に人を呼び込む観光産業との連携、若者を主体とした農業への理解促進、医療・通信・物流など生活基盤の充実強化等が求められます。もちろん、農業者自身の自立や経営改善努力は必要ですが、国全体で農村の地域振興を進めることが重要ではないでしょうか。

ところで、私は静岡市内の人口14,000人ほどの丸子という地域で14年ほど前から仲間と一緒に高齢者福祉、防災、防犯、観光、農業環境づくりなど多岐にわたるさまざまな地域活動をしてきました。「自助、共助、公助」の内、共助が必要との理念から「まずは地域でできることは自分たちで動く」ことを実践しています。

農村地域においても同じことが言え、地域住民が主体に行動し、これを国や県市町が支援する農村振興が望ましいと考えます。

同窓会員諸兄の活動拠点で起きている「農業と地域の課題」について

今一度立ち止まって見つめ、自助、共助の第一歩を歩み始めて欲しいと願っています。

開学5周年をむかえ 新たなステージへ

農林環境専門職大学学長 鈴木滋彦



同窓会の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

令和2年に開学した本学は、「完成年度」の4年間を終え、新たなステージを迎えています。最初の4年は「揺籃期」にあるとみられています。5年目からは教育の質保証をめぐる厳しい認証評価を受けるなど本格的な大学づくりが始まっています。また、県立の組織体としても、財政面などで「庇護下」にあった最初の4年間は終わり、これからは厳しい査定のもと運営が始まったものと認識しております。

そのような状況下で、一番の支え



開学5周年記念講演会（令和6年12月）

となるものは学生の元気な姿です。コロナ禍で止まっていた大学祭が令和5年に復活し、今年度も多くの皆さんを迎え入れて盛況のうちに終えることができました。学生の力は「たいしたもののだ」と実感した次第です。

また、昨年3月には短大は3回目の学位記授与式を行い、四大では令和2年入学の一期生、すなわち初の卒業生を送り出すことができました。これまで269名を世の中に輩出し、8割以上が農林業系の分野で活躍しています。卒業生が活躍しているという話を聞くことが、大学人にとってはなによりの励みになります。

昨年12月には、開学5周年記念講演会を新装直後の磐田グランドホテルで開催することができました。これは、クラウドファンディングで賄われた企画であり、同窓会の皆様のご芳志、ご支援により可能になったものでございます。あらためて、感謝申し上げます。磐田市長様、(株)

Happy Quality 社長様、本学教員の3名による講演が好評でしたが、加えて紹介された卒業生のメッセージが素晴らしかったとの声を頂きました。

《支部だより》 同窓会西部支部長として

西部支部長 青山 東一
【農業短期大学校総合農業学科
5期生 昭和55年3月卒業】

同窓会西部支部長として、2年間務めさせていただきます。

西部支部長を諸先輩方が務めて頂いていたこの20年間ほどは、前任者から引き継いだ事務局として、会報の発送など裏方として雑務を行ってきています。

西部支部の役員もここ数年は、新規の方を勧誘してこなかったことから、全員が60代以上となり、若返りが必要な状況です。松井前支部長もこのことを気にしておられ、支部活動を引き継ぐ人材を早期に探さなくてはと在任中よく言っていました。2期4年の支部長を務め、後任に私を指名して相談に乗るよと言ってくれましたが、12月に帰らぬ人となっていました。支部長を降りても事務方のお手伝いはするからが最後の言葉でした。

この2年間は支部長と事務局を一

人でこなすことになりましたが、次の支部長や事務局を誰にお願いすれば良いかを考え、バトンを渡すことが私に与えられた2年間の仕事だと思っています。

昨年、会報に寄稿して一緒に支部役員をやりましょうと投げかけましたが、反応はありませんでした。現実には、厳しいなあとの思いが募ります。

《活躍する卒業生》 「激動の時代 仲間にも助けられて」

石川 和弘
【昭和54年度 農林短大卒】

1980年3月に農業短期大学校第5期生として卒業し、縁あって静岡県経済連に入会し、営農関係を長きにわたり担当させていただきました。経済連業務を遂行するにおいて、農短での2年間の学習や実技研修も役立ちましたが、それ以上に先輩・後輩の皆様が各地で活躍をされており、いろいろな場面で業務上お会いすることが多く、叱咤激励・ご指導を受けたことが非常に役立っていると感じています。また、地域のリーダーや普及員やJA関係者も多いことも非常に心強く助かりました。高校では「高品性」「重労働」を学び、その後の農短では人間関係の幅を大きく広げられたことが今に

繋がっていると信じています。農短在学中に感じた静岡県農業と経済連在職中に感じた内容は今思えば大きな格差があり、在職中の農業をめぐる環境の変化はそれ以上に大きなものでした。入会当時先輩からは「農家所得の向上」に向けて指導を受け、現在では自らの口で後輩に発言するようになりました。在職中にはいろいろな出来事があり、生産者の皆様を核に、JAグループとして乗り越えてきたと思っています。例を挙げればきりがありませんが、「農協改革」「安心・安全農産物の提供」は記憶に強く残っています。

2024年は農業にとっても波乱の年でした。猛暑・酷暑、豪雨等によりお米をはじめ、秋冬野菜・果実・畜産物等多くの農産物の生産に影響しました。また、地政学的リスクによる資材高騰も営農継続に影響しております。今後も静岡県農業の持続的発展に向けて、同窓会員及び農業関係者の連携により努力していきます。農林環境専門職大学の皆様の今後の活躍を祈念いたします。



《活躍する卒業生》 「耕土耕心」今も昔も

増田 壽彦
【昭和54年度 農林短大卒】



私は、昭和55年3月に農業短期大学校総合農業学科を卒業しました。農業短期大学校5期の学生であり、この年は講習所から続く静岡市北安東の地から、磐田市富丘に移転する時期でもありました。

2年間の学生時代は、初めての寮生活や一人暮らし、生まれ育った御前崎（当時は浜岡町）を離れ自由さを得ました。しかし、お金は無く経済的に不安である、入り混じった気持ちの2年間だったと思います。

卒業後は当時の先生方の御配慮にも恵まれ、県の職員として就職できました。

地元の中遠地域をはじめ、西部地域の農林事務所職員（普及指導員）として、野菜の技術・担い手育成の指導に多く携わりました。さらに県庁や研究所において県下広域の仕事にも関わることができました。

その後、農林大学校、専門職大学の講師として教員活動を通算で10年間行いました。振り返ると、農業知識の全く無い私を当時の農業短期大学校が受け入れてくれたことこそが、今日に至る原点であったと感謝しております。

今年の3月まで専門職大学の野菜（露地）の教員として、学生と一緒に畑やハウスで圃場実習をし、つたない知識を学生に伝えておりましたが、4月からは地元で小さな野菜農家になる予定です。

学生は、時代が流れ、気質も考え方も変わりました。

しかし、夏の暑い日に「耕土耕心」のTシャツを着た専門職大学の学生は、畑の管理に汗を流す。「農業はおもしろくなりそう」「農業が変わる」今の学生も昔の学生（私の頃は「耕土耕心」なる理念もない時代）も、同じような気持で農業に期待を寄せていた気がします。

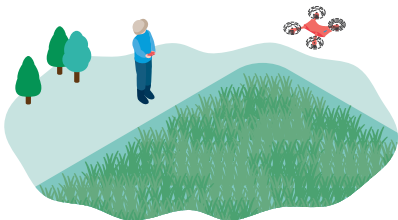
同窓会の皆様のご活躍並びに、専門職大学の益々の発展を、祈念いたします。

《学校の話》 資格取得を 支援しています

【農林環境専門職大学専門職大学
学生課】

農業現場の即戦力として対応出来るように、学生達は、授業を通じて取得することができるトラクター免許や刈払機安全衛生教育の資格取得の他、様々な資格取得に努めています。農業の実務に役立つ資格として、農業技術検定、毒物劇物取扱責任者、危険物等取扱者などの資格取得を推奨するとともに、機械系については、フォークリフトの運転技能講習、バックフォール、ホイールローダーなどを取り扱うことができる小型車両系建設機械（3t未満）の運転の業務に係る安全衛生特別教育の他、最近では、農業用ドローンを取り扱うことができる産業用マルチオペレーター技能検定などの資格取得を支援しています（機械系の資格は、本学の校内で、学科・実技を受講できるようなっています）。農業用のドローンの技能検定は、現状では、目的（農業用）と機種ごとに限定されたライセンスとなっていますが令和4年度から航空法が改正され国のライセンス制度が始まったことから、これに対応し、学内においても2等無人航空機操縦士のライセンス

スを取得できるようにしていきたいと思っています。



《学校の話題》 開学5周年記念 講演会の開催

【農林環境専門職大学専門職大学
総務企画課】

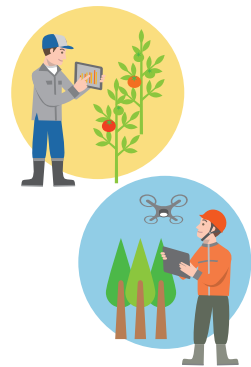
開学5周年を迎えた令和6年12月10日に開学5周年記念講演会を開催いたしました。

当日は、草地球場氏（磐田市長）からは磐田市の農林業について、宮地誠氏（株式会社Happy Quality代表取締役）からはAI等の活用による農業経営についての御講演、生産環境経営学部の遠志保准教授（民俗学）による徐福伝説についての講演も行われました。

また、卒業生によるビデオメッセージも上映され、御出席いただいた皆様に様々な分野で卒業生たちが頑張っていることを知っていただくよい機会になったのではないかと思います。

当日は約1000名（オンライン含む）に御参加いただき、盛会の中に終えることができました。

この講演会の開催に当たっては、多くの同窓生の皆様にクラウドファンディングを通じ、多大なる御支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。



同窓会報は、大学ホームページにも掲載しています。
こちらのQRコードからご覧ください。



《事務局からお願い》
住所変更、訃報等は、各支部長又は支部役員まで連絡をお願いします。

学生有志が県内ビール製造会社と作ったクラフトビール

「璃の香えーる」

かいう病に強いレモン
「璃の香」を使っています。

